

濃七郎す、みて筒をまばしふりてぬきければ、三を打たりけり、次に參河房す、みて調一とつちを打たりけり、人々目をおどろかして、此うへは何をかうたん、參河房懸物とりつとの、しりあへるに、九郎三三原補一本、今す、みて、よく久しく筒をふりて、調一をおり重たりけり、凡夫のまわぎにあらずとて、九郎三とりてけり、

〔鹿の巻筆〕ばんどや才介

淺草新寺町にすご六のばん、さい、どうなどつくる事めい、まんの細工人あり、江戸中よりあまねくあつらゆるものもおほかりける、さるによつて弟子なども四五人ありて、ふつきにくらし、名をばんどや才介とつきけり、さてうらにやぶのありしに、此竹をきりてどうにつくるほどに、竹の子などのまぶんは、ずいぶんたいせつにまたり、さればもしや人の竹の子をぬすみて、きりもやせんとおもひて、かぞひまゐるしなどをつけておきしに、いつのまにか竹の子十四五本もぬすみとりたり、才介もつての外に立腹して、弟子どもよびて、とかく外からぬすむべきにあらずと、ことごとくせんぎするに、きけばすきとすごろくの事にて申あいけり、やいそこなでつちめは、まらぬか、でつちきいて、わたくしが重二や三にて、そもやそも此竹の子をとりませうか、一六におといなされいと申、一六をよびてせんさくすれば、うらに母いんきよしていらる、にいんきよのまゆ三さまにおき、なされいと云、さらばとて、さい介いんきよへゆきて、まゆ三坊こなたは、竹の子はきりたまわすやといふに、ゐんきよ、さて、おでまへのたいせつにまらる、ものを、おのれきる物か、そなたのおせうから、おこつたま、やう六ばかりかいていて、うか、とまたるゆへ、でく介や三四郎をよびてき、やれ、あいつらが一二をあらそふて、四かねるやつでないといわれて、又兩人をよびてとふに、我々四六年もほうこうつかまつります、ずいぶんふぎはつかまつらぬ物を、六地に御意なされい、われらがばんは、まませず、たとひどうぎりになります